

# 「おおきなかぶ」の日本への紹介と変容―成立

On the Introduction of the Russian Folk Tale "A Big Turnip" to Japanese Children

花井 信

(Makoto HANAI)

## はじめに

ロシアの民話「おおきなかぶ」は、子どもに人気の教材である。小学校国語教科書には、二種類の翻訳が載っている。一つは西郷竹彦の訳（たとえば光村図書）、もう一つは内田莉莎子の訳（たとえば東京書籍）である。それぞれ個性的でありながら、内田訳はもとも福音館の「子どものとも」シリーズの一つとして訳されたのに対して、西郷訳は教科書用として訳されたと思われる、西郷訳のほうに、教材的臭味が強い。

「おおきなかぶ」の教材としての意味合いは、一方でテーマ性を取り上げ、弱いものでも大きな力が発揮でき、大きな仕事に貢献できるとか、いろいろなものが協力すれば――仲の良いものも、悪いものも――何事も実現できると考える。他方では語りの面白さ、動きに着目し、繰り返しの言葉の遊びを重視する教材論の立場もある。

ところで、ロシア民話の本来の形が広く知られることによって、「おおきなかぶ」がなぜ現在のような形に日本では定着しているのか、考える必要がでてきた。そのことを考えることによって、教材論としての意味合いも再考できるのではないだろうか。

（平成十九年十月一日受理）

さいわいなことに、最近『鑑賞文選』が復刻され、その雑誌に「おおきなかぶ」の原型が紹介され、しかも改訂を重ねて、現在われわれが目にしてる姿に変容し、成立したことが知られることになった。したがって、本稿では、「おおきなかぶ」の紹介、変容―成立を追跡することによって、物語本来の意味を考察することにした。

## 1. 訳出の初型

『鑑賞文選』に訳出された最初の「おおきなかぶ」は、大正一四年八月号尋常四年生号であり、その題は、「蕪菁」となっている。表題には読みが振ってないが、本文中には、「蕪菁」とルビが振ってある。この話は、現在の「おおきなかぶ」とは、だいぶ違う。まず、全文を紹介しよう。

蕪菁

おぢいさんが蕪菁を蒔きました。それが育ってから、おぢいさんは抜きにきました。蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りましたが、抜けません。

おぢいさんはおばあさんをよびました。

おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りました。が抜けません。――

孫娘が出て来ました。孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまってエンヤ〜と引張りました。が抜けません。

子犬がやって来ました。子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りましたが、抜けません。

足(?)がやって来ました。足は子犬に、子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りましたが、抜けません。

又別の足(?)がやって来ました。

別の足は足に、足は子犬に、子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りましたが抜けません。

あとから〜と足がやって来て、五本目の足までが来ました。五本目は四本目に、四本目は三本目に、三本目は二本目に、二本目は一本目に、一本目は子犬に、子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんにおぢいさんは蕪菁につかまって、エンヤ〜と引張りました。

やっとの事で抜けました。

『談方鑑賞文選』大正一四年八月号尋常四年①

まず、現在の「おおきなかぶ」と決定的に違うのは、最後に「足」がやってきて、かぶは抜けるという終わり方である。

『鑑賞文選』に載っている物語や詩などは、作者が明記されていたり、出典が表記されているのが普通であるのにもかかわらず、この「蕪菁」は作者も出典も何も書かれていない。いまでこそ、この物語はロシアの民話であることは明白であるが、当時は創作物語と受け取られたかもしれない。

しかし、創作にしては、「足(?)」という、疑問符がついているのは、いかにもおかしい。二カ所もついている。いまでは、もともとのロシア民話がそうなのだから、おかしくはなく、忠実に訳したことがわかる。アルハンゲリスク県で採録した原話では②、おぢいさん、おばあさん、孫娘、子犬の後に足が登場し、結局五本もの足が出てきて、かぶが抜ける。その点、編者のアフアナシーエフ自体おかしいと思ったか、足には疑問符がついているのである。「そこへ一本の足(?)がやってきた」と。

それはそうだろう。おじいさん、おばあさん、孫娘、子犬と出てくるのは素直にわかるが、最後になぜ「足」なのだろうか。しかも五本も出てきて、それがかぶを引っ張るなどという荒唐無稽の物語ではないか。怪奇に思えるお話である。

ただ、この昔話は、記録した地域や人によってちがいがあり、オンチエコーフが記録した原話によれば、最後にはねずみが出てきて、「ねずみがかぶをひっこぬき、かりかりかり食べちゃった」と終わるらしい③。

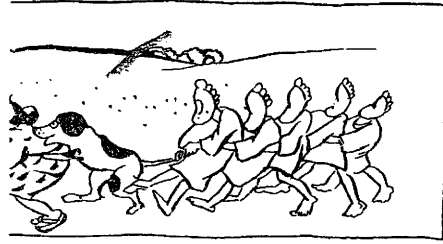
## 2. 改訂第二型

『鑑賞文選』に載った「蕪菁」が人気だったのか、第二次の改訂版が昭和二年一月号尋常二年『カンシヨウブンセン』に掲載された。それは、



ばあんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りましたが、抜けません。  
 足(?)がやってきました。足は小犬に、小犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りましたが、抜けません！  
 あとから〜足がやってきました、五本目の足までがきました。五本目は四本目に、四本目は三本目に、三本目は二本目に、二本目は一本目に、一本目は小犬に、小犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りしました。  
 やつとの事で抜けました。

(17)



おぢいさんが蕪菁を蒔きました。それが育つてから、おぢいさんは抜きにきました。蕪菁つかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが、抜けません。  
 おぢいさんはおばあさんを呼びました。おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつてエンヤ〜と引張りしました。が抜けません！  
 孫娘が出て来ました。孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが、抜けません！  
 小犬がやってきました。小犬は孫娘に、孫娘はお

蕪菁

(18)

図1 『カンショウブンセン』昭和2年1月号 尋常2年

絵入りであったので、それを図1として載せておく。足五本が最後を引張っている。絵がつけられていることは、子ども向けのお話としては貴重な改訂である。そして、「抜けません」の繰り返しの三カ所に感嘆符へ！〜が新しくつけられたことも、改訂の特長である。見やすいように、文章だけを書き抜いておく。全文漢字にルビがつけられているのは、二年生用を考慮したからであろうか。

蕪菁

おぢいさんが蕪菁を蒔きました。  
 それが育つてから、おぢいさんは抜きにきました。 蕪菁 つかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが、抜けません。  
 おぢいさんはおばあさんを呼びました。 おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつてエンヤ〜と引張りしました。 が抜けません！  
 孫娘が出て来ました。 孫娘はおばあさんに おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが、抜けません！  
 子犬がやってきました。 子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが抜けません。  
 足(?)がやってきました。 足は子犬に、子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはおぢいさんに、おぢいさんは蕪菁につかまつて、エンヤ〜と引張りしましたが、抜けません！  
 あとから〜足がやってきました、五本目の足までがきました。五本目は四本目に、四本目は三本目に、三本目は二本目に、二本目は一本目に、一本目は子犬に、子犬は孫娘に、孫娘はおばあさんに、おばあさんはお

ぢいさんに、おぢいさんは無青むせにつかまって、えんやくと引張りひっぱりました。  
やっとの事ことで抜けぬきました。

『カンシヨウブンセン』昭和二年一月号 尋常二年(4)

改訂といっても、登場人物に変化はなく、初型を継いでいるので、第二型としておこう。内容上の変化は、初型にあった、「足(?)がやって来ました」の次の、「又別の足(?)がやって来ました」以下の部分が削除されて、すぐに、「あとからく足がやってきて」と繋げたことぐらいである。原話から離れた部分である。

足が出てくることについて、斎藤君子は最初、「この足になにか意味がありそうですが、今のところそれは謎です」としていた<sup>(5)</sup>。しかし、後になって、ロシアに根菜類を抜き取る動作を模した遊戯があることを指摘した上で、「スウエーデンの類話にも『一本足』が登場することを考えると、どうやらこの奇妙な登場人物は、片足をつかんで引つ張る、子どもの遊びから昔話のなかに取り込まれたようだ」という回答をしている<sup>(6)</sup>。

複数の子どものうち一人がかぶになり、別な子たちが抜く役になる。抜かれた子は、今度は抜く側にまわる。つまり、こうした鎖状につながって遊ぶ、「所作をとまなう遊戯歌だったのだ」。

### 3. 日本版「おおきなかぶ」の原型誕生

第三次改訂版は、昭和二年七月号二年生号の『カンシヨウブンセン』に掲載された。そのときに、現在われわれが目にする形として成立した。おおいに工夫されているので、そのまま図2として、紹介しておこう。

かぶらのたね

おぢいさんか まいた かぶらの たね  
めがでて はがでて ずんずん ふとる

おぢいさんが かぶらに つかまって

えんや えんやと ひっぱった

ひいても ひいても

なかなか ぬけぬ

おばあさんが かせいに やってきた

おばあさんが おぢいさんに つかまった

おぢいさんが かぶらに つかまった

えんや えんやと ひっぱった

ひいても ひいても

まだまだ ぬけぬ

まごが かせいに やってきた

まごが おばあさんに つかまった

おばあさんが おぢいさんに つかまった

おぢいさんが かぶらに つかまった

えんや えんやと ひっぱった

ひいても ひいても

とっても ぬけぬ

犬も かせいに やってきた

犬が まごに つかまった



まごが かせいに やつてきた  
 まごが おばあさんに つかまつた  
 おばあさんが おぢいさんに つかまつた  
 おぢいさんが かぶらに つかまつた  
 えんや えんやと ひつばつた  
 ひいても ひいても  
 とつても めげぬ  
 犬も かせいに やつてきた  
 犬が まごに つかまつた  
 まごが おばあさんに つかまつた  
 おばあさんが おぢいさんに つかまつた  
 おぢいさんが かぶらに つかまつた  
 えんや えんやと ひつばつた

(19)



かぶらのたね

おぢいさんか まいた かぶらの たね  
 めがてて はがてて ずんずん ふとる  
 おぢいさんが かぶらに つかまつて  
 えんや えんやと ひつばつた  
 ひいても ひいても  
 なかなか めげぬ  
 おばあさんが かせいに やつてきた  
 おばあさんが おぢいさんに つかまつた  
 おぢいさんが かぶらに つかまつた  
 えんや えんやと ひつばつた  
 ひいても ひいても  
 まだまだ めげぬ

(18)



ねずみも かせいに とんできた  
 ねずみが ねごに つかまつた  
 ねごが 犬に つかまつた  
 犬が まごに つかまつた  
 まごが おばあさんに つかまつた  
 おばあさんが おぢいさんに つかまつた  
 おぢいさんが かぶらに つかまつた  
 えんや えんやと ひつばつた  
 えんや やつこら やつとこぬけた  
 ぬけたら どつしり  
 しりもち ついた  
 みんなが みんなが  
 しりもち ついた

(21)



ひいても ひいても  
 それでも めげぬ  
 ねこも かせいに やつてきた  
 ねごが 犬に つかまつた  
 犬が まごに つかまつた  
 まごが おばあさんに つかまつた  
 おばあさんが おぢいさんに つかまつた  
 おぢいさんが かぶらに つかまつた  
 えんや えんやと ひつばつた  
 ひいても ひいても  
 ひいても めげぬ

(20)

図2 『カンショウブンセン』昭和2年7月号 2年生号

まごが おばあさんに つかまった  
 おばあさんが おぢいさんに つかまった  
 おぢいさんが かぶらに つかまった  
 えんや えんやと ひっぱった  
 ひいても ひいても  
 それでも ぬけぬ

ねこも かせいに やつてきた  
 ねこが 犬に つかまった  
 犬が まごに つかまった  
 まごが おばあさんに つかまった  
 おばあさんが おぢいさんに つかまった  
 おぢいさんが かぶらに つかまった  
 えんや えんやと ひっぱった  
 ひいても ひいても  
 ひいても ぬけぬ

ねずみも かせいに とんできた  
 ねずみが ねこに つかまった  
 ねこが 犬に つかまった  
 犬が まごに つかまった  
 まごが おばあさんに つかまった  
 おばあさんが おぢいさんに つかまった  
 おぢいさんが かぶらに つかまった  
 えんや えんやと ひっぱった  
 えんやら やつこら やつとこぬけた

ぬけたら どっしり  
 しりもち ついた  
 みんなが みんなが  
 しりもち ついた

『カンシヨウブンセン』昭和二年七月号 一二年

この改訂で、内容が大幅に変わった。登場人物として「足」が消え去り、代わりに「ねこ」と「ねずみ」になった。第二に、散文調から動きのあるリズムを持った文体になり、行換えも多く、かつ場面の展開ごととの連に分けられた。第三に、全文ひらがなで、しかも分かち書きを採用している。第四に、物語の進行にあわせる形で、絵を四種類でつなげている。第五に、連の終わり方が「なかなか」―「まだまだ」―「とつても」―「それでも」―「ひいても」と、すべて変化をつけている。第六に、表題も含め、「かぶを蒔く」から「かぶのたねをまく」に変わっている。

リズムを持った型に変わったことは、原文の調子を生かした訳になったといえる。筆者はロシア語には無知であるので、専門家の説明に耳を傾けよう<sup>⑧</sup>。ロシアにおける昔話の主人公は圧倒的におぢいさんとおばあさんであるらしい。そうすると、おじいさん(ヂエートカ)、おばあさん(バープカ)とならんで、まごむすめ(ヴヌーチカ)となり、子犬(スーチカ)も、語尾に同一の接尾語を持つことから、問題のかぶも、レーバという一般的な名詞ではなく、レープカという語が選ばれている。しかもこれらはすべて語頭にアクセントがある上に、二音節で表現される。

「語りだしの『お爺さんが種をまきました』という文章は、『蕪』と

『お爺さん』の語呂合わせによって生まれたのだ。『男は度胸、女は愛嬌』のようなものである」と専門家の解説は、かみくだくように続く。

そして、このお話は一人ずつ登場人物が増えて、同じ行為を繰り返す「累積民話(昔話)」であり、ロシアの民話には多いタイプであるという。そのため、語り口調は、二拍子のアクセントが規則的に並び、強弱の繰り返しというリズムが生まれる。

こうした「累積民話(昔話)」は、鎖状につながったものが切れて、もとの状態に戻ることが重要なのであり<sup>⑩</sup>、そうであれば、終わり方がいかにもという形が、すくと落ちる。第三次版は、「ぬけたら どつしり／しりもち ついた／みんなが みんなが／しりもち ついた」と、工夫する。

そうした原話の雰囲気をよく表わした翻訳として、第三次改訂版は登場した。

現代の内田莉紗子の訳はA・トルストイの再話となっている。それは、齋藤君子によれば、一九三六年である<sup>⑪</sup>。したがって、日本型第三次版が依拠する民話にはなりえない。考えられるのは、K・ウシンスキーの再話が一八六四年に挿絵つきでなされたから、「おおきななぶ」はロシア全土に広まったと齋藤が述べているので、アフナーシエフからウシンスキーへと依拠する原話が変わったから、こうした内容の変化になったのかもしれない、ということである。アフナーシエフによる編纂は、ただの文章として記録してあるだけだから、子どもの読み物としての形式上の工夫はなにもない。ウシンスキーのものは、いったいどういふものなのだろうか。専門家の教示を得たい。

それにしても、アフナーシエフによる出版は一八五五年から一〇年近くかかって分冊でなされたというから<sup>⑫</sup>、ウシンスキーのものとの間には、さほど時間的相違はないので、訳出の初型から第三次版の間に、

依拠する版が変わったと考えることはできるのだろうか。

アフナーシエフ版のままで翻訳者の創意で変更したのであるとすれば、日本版として独自性が認められるであろう。その意味で日本版原型の誕生としておきたい。

「累積民話(昔話)」が、鎖状につながることの特徴があるとすれば、そのつながりかたは、後から来たものから前へという順がよい。まごむすめが子犬を呼べば、子犬がまごむすめを引っ張る、とつなげるのがスムーズである、続けて、まごむすめがおばあさんを引っ張る、おばあさんがおじいさんを引っ張るといふ具合に。「おおきななぶ」のバージョンで、ニキーフォロフ編纂のものは、登場人物の鎖を前から後ろへ、「じっちゃんがかぶを、ばっちゃんがじっちゃんを」とたどるようである。それについて、齋藤は、「登場人物の連鎖を前から後ろへたどるために、語りのリズムが乱れ、並び順にも混乱がみられる。これでは聞いている子どもたちの頭の中も混乱する」と厳しい<sup>⑬</sup>。

この考え方をとれば、日本版原型はしっくりとなじむ。ところが、教科書で現代に広まっている、西郷竹彦訳版は、登場人物を前から後ろへたどるから、一考を要する。しかも、「かぶを おじいさんが ひっばって、おじいさんを おばあさんが ひっばって」と倒置法を採用しているから、余計に難しい。

## おわりに

昔話に教訓的意味を持たせることは、近代日本でもあったことである。時代の社会状況や政治的意味合いを濃厚ににじませることもされてきた。「おおきななぶ」も、どうやら社会主義ソビエトの精神である、働くものの団結、弱いものの立場でと、日本でも解釈されたのではないだ

ろうか。しかし、原話のもくろみは、遊びの語り、動作の遊戯化を語りにしたとみられる。そうであれば、教材としての「おおきなかぶ」については、物語のテーマ性を考えさせるのではなく、リズムに乗った語り遊びに、指導の中心をおくべきであろう。声に出して読み、動作がともなうことの楽しさ。その観点に立てば、西郷竹彦のいかにも理屈っぽい文章構造は、考え直されていい。

## 註

- (1) 『復刻鑑賞文選・綴方読本』第一巻、緑蔭書房、二〇〇六年、二六ページ。誤植があるが、そのままである。
- (2) アファナーシエフ・中村喜和編訳『ロシア民話集』(上) 岩波文庫、一九八七年、四七・四八ページ。
- (3) 斎藤君子「ロシア昔話『かぶ』をめぐる」『民話の手帖』第四八号、一九九一年夏号。
- (4) 『復刻鑑賞文選・綴方読本』第四巻、緑蔭書房、二〇〇六年、一七ページ。誤記などがあるが、原文のままである。
- (5) 斎藤君子、前掲「ロシア昔話『かぶ』をめぐる」四九ページ。
- (6) 斎藤君子「大きな『かぶ』の六つの謎」小長谷有紀編『大きなかぶ』はなぜ抜けた? 講談社現代新書、二〇〇六年、二二ページ。
- (7) 『復刻鑑賞文選・綴方読本』第五巻、緑蔭書房、二〇〇六年、一七・一八ページ。誤植があるが、原文のまま。
- (8) 伊東一郎『大きな蕪』から『外套』へ『新日本文学』一九九七年四月号、五四・五五ページ。
- (9) 斎藤君子、前掲「大きな『かぶ』の六つの謎」二五ページ。
- (10) 同右、一四ページ。
- (11) 前掲、アファナーシエフ・中村喜和編訳『ロシア民話集』(上)の「凡例」。
- (12) 斎藤君子、前掲「大きな『かぶ』の六つの謎」二六ページ。